

春期福音特別集会（3）（京都）

新生

——詩篇第2篇——

1975年5月4日

小池辰雄

傍若無神 ゲバ棒にヘルメット 羔羊の怒り 敬天愛人 セントヘレナのナポレオン 「キリスト者は天才よりも少ない」 天震靈震 キリスト教界の盲点は聖霊のバプテスマが無いこと
新生 ニコデモとの対話 神との交通が祈り 泳ぎの秘訣 神は大芸術家 ウェスレーのお母さん キリストの道は女性道 我は今日こそ汝を生んだ 畏れをもって親しむ 聖霊によって生まれなければ 靈界の秘義 祈りの前の黙祷 祈り

【詩篇2】（私訳）

1 何ゆえに諸民は立ちさわぎ、

諸国は虚しきことを謀るのか。

2 地の諸王は立ち構え、

群伯はもろともに論議う。

エホバに背き、その受膏者に逆って。

3 「我らいざ彼らの桎梏をうち砕き、

我らより彼らの縄目を棄て去ろう！」

4 天に坐し給う者うち笑ひ、

主は彼らを嘲り給う。

5 かくて彼は憤怒のあまり彼らに言辞を發し

憤激をもて彼らを顫わしめ給う。

6 「されど我は立てたるぞわが王を

わが聖山シオンの上に！」

7 私はエホバの神命を宣べよう、

彼は私に宣うた、「汝はわが子、

我は今日こそ汝を生んだ！

8 我に求めよ、さらば我は与える、

汝が嗣業として諸々の国を、

汝が有として地の極までを。

9 汝は鉄の杖で彼らをうち破り、

陶王の器の如く彼らを砕く。」



10 さればいざ諸王よ賢くあれ、
警告をうけよ地の審士ら。
11 畏敬をもってエホバに仕え、
戦慄をもって飲び、
12 子に接吻せよ！

彼怒って汝らが途に亡びないために

その怒りはたちどころに燃え立つから。

恵福なる哉、彼に信頼するすべての者は！

● 傍若無神

これも原文の調子になるだけ合わせるように訳したのですが、まあいずれ時間があつたら、詩篇を全部訳して出したいと思いますが、ちよつとこれは先のことになります。

非常に著しい詩篇で、これは分類すると、メシヤ詩篇の第一に属するものです。しかも、詩篇第1篇は全体の総序であるとするならば、詩篇第2篇は全体のアルファ、最初に出てくるところの非常に重大な詩篇です。というのは、キリスト預言に関わっているところですから。

1 何ゆえに諸民は立ちさわぎ、

諸国は虚しきことを謀るのか。

2 地の諸王は立ち構え、

群伯はもろともに論議う。

エホバに背き、その受膏者に逆つて。

諸々の国やその国を支配している王者、また諸侯、群伯といったものが、政治のことを、神に与つて政をする。もともと政というのはそういった宗教的な意味をもっていたはずの言葉なんです、それが傍若無神に——傍ら神無きがごとく——またここにあるように神を嘲るような具合に、勝手に振る舞っている。これは類した国、あるいは主張の、あるいはイデオロギーの国々がスクラムを組んでお互いに対立してみたり——今の世の中もそうです——また力ある者が勝手に適当に組み合つて、弱い者を、弱い国を滅ぼしていくとか。いろいろな歴史が、浅ましき現象が次から次へと起こってきているわけです。

そういう民族、また民族が形成している国というものの一番本質的な自覚が無くして、されている。王が君臨してようが、あるいは民主主義的な意味において民を代表している人たちが政治をとつていようと、結局一番大事な根本的なことが疎かにされているために、それは同じことなんです。いわゆるパブリック（共和国）であろうが、あるいは「キングダム」（王国）であろうが。

3 「我らいざ彼らの桎梏をうち碎き、



「我らより彼らの縄目を棄て去ろう！」

といって、神の神政を嫌って、自分たちが絶対の権力者であるかの如く、いわゆる義に対して力がものをいうような気持ちがここに表れているわけです。ところが、義というのは実は本来、神さまの支配するところが即ち、義であるんです。神の御意が、神の意志が行ぜられいるところ、実現しているところが即ち義の国であり、キリストが、

「神の義とその国とを求めよ」

と言われた、その「神の義」と「その国」というのは同じこと。神の義の行われるところが即ちその国なんです。

「神の国、天国、バシレイヤ」

という言葉は、

「神意の支配しているところ」

という、神の支配するところが即ち「パラダイス」です。またそれが「義の国」なんです。

●ゲバ棒にヘルメット

それを蔑^{なみ}するような角度。今一般に言いますと、なにか若者の力がものいつているような状態で、とんでもない。だいたい、大学にゲバ棒を持ってヘルメットなんか被^かつて来たら、どんどんとつ捕^{とら}まえてしまえばいい。

「大学の要請がなければ警察が入ってはいけない」

なんてバカなことではない。大学という所は学問する所で、棒持つ所ではない。そういうことに対してもつと強力な政治をなぜしないか。その点ではヨーロッパやアメリカはもつと強力にやったから早くおさまったのに、日本はいつまでたつてもどういふことですかね、日本という国は。そういうことで正しい事がはつきり行われていない。大学の自由というのは責任がある。学問の府としての責任があるところへもつてきて、勝手気ままな自由なんてあるはずない。

私は一遍、吊るし上げをくつたことがある。もうひとりの先生と二人で壇上にいた。私は自分の誕生日だったからよく憶えている。

「だいたい、君たちのような、そういうものの言い方をするに対して私は返事するわけにいかん」

というわけで、我々は沈黙をまもって、10時間くらい居たかな。

そんなことで、力がものを言っているんだから、とんでもない。大学という所は理性がものを言うところで、大学の本質に反している。そういうのが学生だなんて言えやしない。あんなのはヤクザと同じだ。

そういうようなわけで、日本の国は、この詩篇をみると、これがなにも王者でなくて、一般に民間の若者の間でもつてこういう事がある。日本という国はそういう事にはなるた



け触れないで、黙って傍観していようなんて。私は今度書く本の中（著作集第1巻『無者キリスト』／第7章天鐘詩集／「教育の危機」）にも詩でもつてはつきりとうたっていますから。

● 羔羊の怒り

ところが、そういう事態は、いくらそうやっても必ず力は力自らによって滅びていく、そういう腕力的な、武力的力というものは、

「剣を取る者は剣でもって倒れていく」

とキリストが言われたとおり。剣を取るものは結局、自殺行為ということです。だから、

4 天に坐し給う者うち笑い、

主は彼らを嘲り給う。

と。天に坐する者が「笑う」という、こういう表現は聖書で詩篇のここだけにしかない。それだけ非常に特色のある言葉です。

まあ一生懸命でやっているが、可哀相なもんだと。神さまが憤ったら恐ろしいですよ。笑っていらつしやるうちはまだいいけれども。笑いでおしまいだと思ったら大間違い。

「羔羊の怒り」

というのがあ。黙示録6章に、

「¹²第六の封印を解き給いし時、われ見しに、大いなる地震ありて、日は荒き毛布のごとく黒く、月は全面血の如くなり、¹³天の星は無花果の樹の大風に揺られて生後の果の落つるごとく地におち、¹⁴天は巻物を捲くごとく去りゆき、山と島とは悉くその処を移されたり。¹⁵地の王たち・大臣・将校・富める者・強き者・

ほら、書いてあるとおりだ。

奴隷・自主の人みな洞と山の巖間とに匿れ、

大変だというわけで隠れる。ところが、

¹⁶山と巖とに対して言う『請う我らの上に墮ちて、御座に坐したもう者の御顔より、羔羊の怒りより、我らを隠せ。¹⁷そは御怒りの大いなる日既に来ればなり。誰か立つことを得ん』（黙示録6・12～17）

いわゆる権力者はすべてこの世で栄えているところの傲慢な霊だ。これがみんな、どうにもならんと言って、

「山でもひとつ崩れてきて隠してくれ。神さまの怒りに、羔羊の怒りにあつたらんうにもならん」

と。羔羊は一番柔和な動物だ、これが怒るとい。もちろん「羔羊」はキリストのことです。キリストは、キリストの怒りは爆発する。不義を悔改めないかぎり、これは審かれざるを得ない。



「聖霊に逆らっている罪は赦されない」

とある。神の霊に逆らっているところの罪は、これは赦すわけにゆかない。一遍逆らつても、「本当に悪かった」と言つて悔改めれば別ですが、逆らっているかぎり、これははつきり滅びます。

●敬天愛人

そういうことで、神を無視している。だから、私は学校でも教育の根本方針に、西郷南洲の言葉を使つて、

「敬天愛人」

ということをやっている。天を敬し、人を愛する。東西すべての宗教の絶対的な境地を「天」という言葉でもつて代表している。

私は自分の号に「天」というのを付けるのはそういう気持がある。私の名前は「辰雄」というから、私はどうも雨を呼ぶ男らしい。雨呼ぶ龍で「辰」になつてしまった。天が震つている。天が怒りで震つているから「天震」という。あるときは、^{あした}晨、「天晨」という言葉になる。まあ私の号はいろいろ変わりますから。

キリストは柔和なる君であると同時に、これがひとたび怒れば、何ものもどうにもならん。最後の審判の時が来るといふ。そういうのが^{おそ}羔羊の怒り。

黙示録のパトモス島におけるヨハネが天界のキリストから受けた「黙示」というのは本当は「顕示」なんです。「アポカリプシス」というのは素晴らしいものです。これはみな

「最後の歴史の終わりにこんなことになつてゐる」

という。それはひとつのその時示された現実ですが、これはみんな象徴です。どういう終わりが来るか。これをもつて象徴されているような^{おそ}畏るべき事がやってくるということでありまして、聖書はだんだん地上が天国になるなんて書いてない。

「末の日に信を見んや」

とキリストは言われた。キリストもマルコ伝13章で最後のカタストローフェの事を語っておられる。それほどにまで人間は救い難い。だから、悔改めてキリストのもとに立ち帰る。本当に立ち帰ることが前進である。

正直、日本は浮いてます。日本の青年がいつペン、韓国と北朝鮮の国境あたりに行つてみたらいい。非常な緊張関係です。もちろん、戦争の脅威をただ脅威として見るのではなく、いけれども。とにかく日本人は——たたいわゆる昔の意味における「愛国」ということを言っているのではないけれども——本当に国を愛するということならば、我々がもつと自覚しなくてはいいかん。いわゆるマイホーム主義なんかやつていたら。さきほどもちよつとお話したように、日本人は、それこそ笑われますよ、侮られる。

「なんだ、日本人というのは魂があるのか」



なんて。正直そうわれますよ。本来の日本人は、「大和魂」というのはそんなものではない。どうぞ、皆さんは一から一へと——本当にもう他人事ではない——我々一人びとりが絶対この神・キリストとのこの対決において本当にその世界に入る。もう私は表現できないです、このキリストの中に入るといふと。もうその人の相対的な才能とか何とか、そんなことではありません。絶対の世界ですから。無条件の世界です。どうぞ、この無条件の世界を本当に受けとってください。

●セントヘレナのナポレオン

それから、この羔羊の怒りという恐ろしいことが今に来る。魂の世界はたかをくくってはいかん。魂の世界は誤魔化しがききませんから。たかをくくっている人はたかくくっているような魂になってお終いです。いわゆる人間的な立派さだとか、人間的な信仰が厚いとか、そんなことを言っているのではない。もつと突き抜けなければダメなんです。

いくら強国でも、英雄でも倒れていく。ナポレオンは大英雄であつた。ヨーロッパを席捲した。けれども、セントヘレナで最後にナポレオンは何と言ったか。私はヒルティを書いているところ（著作集第5巻『百世の師ヒルティ』）で紹介しますが、彼は最後に福音書を繙ひもといた。そして、ナポレオンは初めて豁然かつぜんと分かった。

「福音書は本ではなかった。これは生き物であつた。」

福音書の活字に——本当の活字だ、活ける字だ——彼は驚嘆して、

自分はこのキリストに参つた。

と。そういう言葉ではないけれども、そういう角度でものを言ってます。そして、

キリストは本当に天と地を繋いだ人だ。これを離すものは、いかなる力もない。自分

はこの前には本当に無力であつた。」

と。さすがはナポレオンです。彼はそこでそのことを正直に告白している。もう人間的英雄なんていうものは、これはダメですから。本当の勇士ますらおは、本当の英雄は——シェイクスピアは、

「弱き者よ、汝の名は女である」

なんて言うけれども、実は女性でもジャンヌ・ダルクみたいなのがいたでしょ、本当に強い——男性、女性ではないです、本当の強さというものは。神さまの前に本当に弱くなると、神さまの前に平伏すと、強者になる。これはパウロが言っているとおり、

「我弱き時に強し」

と言った。自分に強いなんて思っているうちは空元気です、そんなものは。神の前に本当に平伏す人が本当の強者になります。

そのことで私は、「敬天」と言うのは、だてで言っているのではない。私は中学・高校の生徒に、



「お前たちはこの畏るべき者を畏れなかったらダメだ。そういうしつかりした魂になれ。私はそこから要求している。お前たちが聴かなければ、私はいつでも校長なんかやめるから」

とはつきり言ってます。

●「キリスト者は天才よりも少ない」

私たちはキリスト者として——キリスト者というものはただクリスチャンなんて言ってるのではない——本当に現実にキリストの有^{もの}、キリストに属するもの。パウロと同じく、

「我はキリストの僕・婢女^{しもべはしため}である」

といって、本当にキリストと一つになっているのがキリスト者です。キルケゴールが言っただでしょ、

「本当のキリスト者は天才よりも少ない」

と。天才は少ない。本当のクリスチャンは天才よりか少ないと。さすがにキルケゴールの鋭い言葉だ。当時の教会に対してキルケゴールは非常に警告を発しているわけです。『アングリフ』（攻撃）という教会攻撃の本があります。それは単なる教会攻撃ではない。キリスト教は今はそのなことではダメだと。それから、ヘーゲルの哲学に向かつても彼は勇敢に戦った。もちろん、キルケゴールを私は100%に肯定しようとは思わない。

キリスト者は天才よりも少ないけれども、またキリスト者は誰でもがなり得る。天才は誰でもなれませんよ。けれども、本当のキリスト者には誰でも例外なしになり得る。無条件の世界だもの。

「どれだけ才能がなければいかん」

だとか何とかと、そういうことではないんだから。誰でもが無条件になれる。条件つけているからなれないんですよ、みんな。なぜ条件つけるんですか。

法然、親鸞の信仰は弥陀の本願に対しての無条件の信仰です。ここには本願寺というのがあるし、京都の方々は宗教的な素晴らしい伝統をもっている。これを完成するものはこの原始のキリスト教、キリストの道、これが完成します。

●天震靈震

「神の笑^{あずか}い」に与^{あずか}つたらしようがない。神の歆^{あずか}びに与^{あずか}らなくては。神さまは、

「われ汝を悦^{いつく}ぶ。汝はわが愛^{いとく}しむ子なり」

という。

5 かくて彼は憤怒^{ふんぬ}のあまり彼らに言辞^{ことば}を發^はし

憤激^{ふんげき}をもて彼らを顫^{ふる}わしめ給^{たま}う。

天震といえますか、時々、地震が起きる。だいたい、松代なんていう所は非常に岩盤の



強い所で、なかなか地震なんか起きる所ではない。それだから、あそこに戦争の末期に大本营を築こうとした。ところが、どうですか。あそこが今度は地震だ。どうしてあそここの所にある時期に絶えず地震が起きたのだろう。

私はこれを霊震と申します。神の霊が震うんです。なぜ、神の霊があそこで震ったか。言いません私は。私はある直覚をしている。この神の霊が振りました。これが地震という現象に起きただけのなし。人間の世界にあるまじきことが起きるといって、神は震うです。関東大震災も単なる物理的な法則が働いたばかりではないと思う。そのことは、私の先生の藤井武先生も書いています。

まあ日本はこのままで行ったら、本当にどうなるかわからんですよ、正直ね。一番大事なのは、経済問題でも、政治問題でもない。日本人の魂の問題。これが迂遠なようで一番近道なんです、この問題を解決していくことが。そうすれば、経済問題だって自然に解けてゆくは。いろんな不合理、不均衡が行われているからどうにもならん。それは結局、たせば、みんな人の心の問題だ。一番身近な問題を一番蔑ろにしているから。私は憤慨でしようがない。教育界にいるものだからなおさらに。

●キリスト教界の盲点は聖霊のバプテスマが無いこと

神さまはついに憤怒のあまり憤激をもって彼らを震わしめ給う。

6 「されど我は立てたるぞわが王を

わが聖山シオンの上に！」

これは不思議な詩篇ですね。もちろん、詩篇を作ったときには、確かにイスラエルの王様が或る期待をされて立ったんでしょう。現実の王様に期待はかけられた。もちろん神の面を代表して政を行うのがイスラエルの王でありましたから。そしてこの王に預言者たちが膏を注いだ。

「膏を注ぐ」
あふら

というのは、按手あんしゅによって神霊を注ぐ。サムエルは必ずそのことをやった。手を按くことを「按手」と言います。キリスト教界には按手礼というのがある。按手礼をやるけれども、牧師さんが本当に神霊に与ってなくて按手礼したって、これは形式ですよ。洗礼もそう。私はハンブルクでルッター教会に行った。副牧師が、私に少し聖書の時間をもってくれというから数回やった。そしたら、副牧師が驚いて、

「どうして、そういう心境になったか」

と聞くから、私は聖霊の体験のことを語った。向こうの教会新聞にもそのことを書いた。

「今のキリスト教界の盲点は、聖霊のバプテスマが無いことである」

と、これもしっかり書きました。副牧師は、私を壇上に立てて教会で話してもらいたかった。ところが、正牧師が



「あれはバプテスマを受けてないからダメだ」

と。私は牧師さんからバプテスマなんかを受けてませんよ。キリストから直接きているから。水のバプテスマではない。聖霊のバプテスマを受けている。そんなことは正牧師には分からないからね。

「ああ、結構です。私は話しません」

と。そういうわけで、ドイツのキリスト教も一番大事なものが欠けてしまっている。だから、キリスト教を私は逆輸出してきたわけだ。けれども、彼らは本当に受けとらない。ある人たちは非常に驚いていました。テイリツケとか何とかいう神学者とも、あるいはブルナーさんでも、私は世界の大神学者と恐れなく話して来た。

「私は異言の体験がある」

と言ったら、むしろびっくりしているわけだな、向こうは。

●新生

それだから、王を立てたと。即ち、王は膏を注がれる。

7 私はエホバの神命を宣べよう、
みことのり

彼は私に宣うた、
のたま「汝はわが子、

我は今日こそ汝を生んだ！

「神さまは私に、『汝はわが子、我は今日こそ汝を生んだ』と」

これと似た言葉が、キリストがバプテスマをヨルダンで洗礼のヨハネから受けた時に天から響いて来た。

「汝はわが愛しむ子である。
いっく われ汝を悦ぶ」

と。しかもここは、

「我は今日こそ汝を生んだ」

とききました。新生です。キリストもある意味において、あの聖霊のバプテスマをヨルダンで受けた時には、キリストはあるひとつの画期的な新生を体験したわけです。もちろんキリストは、それまでももう神の人であります。けれども、あそこはひとつの彼の生涯における「ヴェンデ・プンクト」転回期である。キリストの生涯には十の転機があります。私は今度出す本（著作集第1巻『無者キリスト』）にこの「キリストの実存十転」と題してそのプンクトを中心にして書いてあります。「註：「キリストの実存十転」キリスト・イエスの受肉（降誕）、受洗、靈戦、伝道、変貌、十字架、復活、昇天、靈降、再臨」

キリストはあそこに初めて本当にこの場に、

「今日汝を生んだ」

という、これはもう確かに靈的な言葉です。新しく神のものとなったということです、「汝を生んだ」というのは。



●ニコデモとの対話

ヨハネ伝3章1節から、

「ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰つかさなり。サンヘドリンの集議所の議員の一人で宰であつた。

夜イエスの許に来たりて言う

他の連中に分らないように夜やつて来たわけです。イエスをあまり肯定すると他の奴に何とか言われるものだから。

『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。神もし偕ともに在いまさずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』

さすがにケタが違うことを彼は認めて、このキリストにこう言った。

「イエス答えて言い給う。『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わす』」

「新たに生まれなければ」と言われたものだから、さあこれはもう年とつたのにどうしたら生まれるのかと、

「ニコデモ言う『人はや老いぬれば、いかで生まるる事を得んや。再び母の胎に入りて生まるること得んや』」

と。バカみたいなことを言ってるんだね。この問答を聞いてみると、もう次元がちがうものだからこういうバカげた反問をしているわけです。

「年とつてから、いかで生まるる事を得んや。再び母の胎に入りて生まるる事を得んや」

とバカみたなことを書いてある。しかし、これは正直にその当時のことが書いてあるからおもしろいね、この対話は。それほどにまで、いわゆる知的なインテリが、全然霊の世界のことが分かっていない。

「新たに」というのは「アノーテン」というギリシア語です。もともとキリストはアラミ語で語られましたから、ギリシア語が原語ではありませんよ。ギリシア語が原語でないということのひとつの証拠として、

「死者をして死者を葬らしめよ」

という言葉があるね。あれを非常にみんなもつたいぶっているいろいろ解釈するわけだ。ところがどっこい、キリストはそんなことは仰らなかつた。キリストは、

「死者は葬儀屋に任せよ。お前は行つて神の国を伝えよ」

と仰つた。その「死者」という言葉と「葬儀屋」という言葉が、アラミ語では母音がちよつと違うだけなんです。母音は書きませんから、子音ばかりだから、同じ字にみえた。これをギリシア語にするときに両方とも「死者」にしてしまった。

「マッタ」（死者）と「ミッタ」（葬儀屋）



という字なんです。「a」と「i」の違い。そういう場合があるわけです。

「富める者が神の国に入るよりも、駱駝が針の穴を通る方がらくだ」

なんて(笑)。いくらキリストでもあまり針小棒大なことを言うなあと思ったら、「針の穴」というのは、「針の穴」という名前の狭い門があつたのだそうです。これは註解書に書いてない。私はイスラエルに行つて、エルサレムの古本屋のユダヤ人に聞いたら、すぐそう答えた。「ああそうですか」と、私は非常に嬉しかったね。そういうわけで、原語はアラミ語なんです。

「人あらたに生まれなければ、天から生まれてこなければ、神の国に入ること
はできない」

と。「天から生まれる」というと、またその文字通りに解釈しようと思つてゐる。この言い方は、みんな象徴的な言い方ですから。「天」と言つたつて自然科学の天ではないよ。霊界のことです。

「霊界の力によつて新たに、魂に、我々の霊に、神の霊がかかつてこなければ」

と。それはさつきから申し上げてゐるとおり、この聖霊のことですから。

「新たに聖霊を受けなかつたならばダメだ」

ということですよ。

●神との交通が祈り

私が、無教会の内村鑑三先生の流れに、キリスト教に入つたのはちょうど20歳のときです。それで50歳まで30年間、無教会のグループの中にいた。無教会の信仰のすじはわるくはない。結構なんです。よく勉強もします。けれどもどつこい、どうしても足りない。何か確信がこない。なるほど、普通の理性とはちがうというところまでは来ている。けれども、どうも何かもの足りないんです、私は正直。それで、私はあるとき、これは祈りの世界が足りないんだなということに気がついた。私は一番先に自分で書いた論文でもないけれども、「祈りの哲学」というのを書いた。これは発表してない。この「祈り」という私の方向はよかつた。祈りの世界です。

イエス・キリストは何よりも祈りのひとであつた。あるいは祈りが一切と言ってもいいくらい。というのは、ただ三昧さんまいに入つてゐるということではない。もう彼の言葉も行為も全部、祈りの境地から発しているわけです。神との交通が祈りですから。

近頃、会話だとか、対話だとか、話し合いだとか言つてゐるけれども、なぜ神さまと話し合いをしないんですか。人と話し合いばかりやって、ちよつと体裁のいいこと言つてゐるけれども。神さまと話し合いをすることがまず話し合いの一番大事なことです。エッカーマンも「ゲシュプレーヘ・ミット・ゲート」(ゲートとの対話)なんて言つてゐる。ゲーテさんは神さまと大分話してゐたからいい。まあ半分冗談で言つたんですけれども、あの



本は非常にいい本ですから、若い人は読みなさい。

そういうことで、深く神との交わり、そしてそこでもって、

「主さまー」

と全存在をもつて呼びかかつて、そして

「われ汝を愛す」

とか

「汝はわがものなり」

とか、何かしらんけれども響いてくる。自分が有るうちは響いてこないですよ、本当に自分を投げ捨ててないと。これは声なき声です。

「闇の夜に鳴かぬ鳥の声聞けば」

という、その声が聞こえてくる。それから捉まえられる。なにか私は神秘的なことを言っているようだけれども。それは言葉の深い意味で神秘は神秘だけれども。

さつきも言ったでしょ、

「全世界の人が私を捨てても、キリストは私を捨てないという確信がある」

ということ。これは私が何ものかではない。キリスト、一切となったときにそうなるんです。だから、そのときに初めて、

「これはキリストのものになった」

ということが、これが聖霊のバプテスマの世界なんです。祈りの世界。それでこういう特別な集会において本当に祈る。もうそのときは体裁もへつたくれもないですよ。

● 泳ぎの秘訣

祈りというのは、沈黙の雄叫びということ。黙っていても雄叫びができる。それから本当に叫んでもいい。なにも人真似はいらん。人が叫んでいたら、同じく自分もその叫びの中に入りなさいよ。人が静かに祈っていたら、静かな中に入る。

雲を見れば雲となり、嵐を見れば嵐となり、微風をみれば微風となり、無風をみれば無風となる。そういう柔軟な――「柔軟心」ということは禅宗でも言う――柔軟な魂にならなければ、この真理の世界に入れない。

「どうも、ああいう祈りはいやだな。私はもう出て行こうかな」

なんて（笑）、そんなことを言っているうちは、体裁を考えているから。また、静かに祈る時にはささやくようにも祈ります。人真似はいらんです。ただし、人がそうである時にはその中に自分を投げ込む。

あの玄界灘は波の凄い所だ。そこへ私は渡っていたんだよ、朝鮮海峡を。そうすると、まわりに幾人かいたけれど、だんだんみんな去っちゃう。みんな酔うものだから。最後に私だけ残ってしまう。なぜ私は酔わないのかというと、私は波となるんです。波となって



そこに居ると、自分が波と一緒にですから——波は酔っついていやしませんよ（笑）——そういう境地にならなければダメなんです。

「いや、私は酔うと大変だな。酔いどめの菓を飲んでおこう」
なんて、ダメですよ、そんなのは。もう何でもそうです。

あの泳ぎの秘訣もそうです。泳ぎは——波がくるでしょ、波をかぶるといけないなんて首を上げるでしょ——くたびれてしまうんだ、すぐに参ってしまう。そうしたら、波をくぐってしまふ、波の中へ。頭をつけて、くじらと同じ。時々、鼻と口からちよつちよつと要領よく空気を吸う。その要領、呼吸がわかつたら——ことに女の方なんか沈みませんから大丈夫です（笑）、恐くないよ。女の人は脂肪が多いから——一番達人になれる。浮身というのは、力をぬくと浮くんです。

信仰もそうなんです。力んだらダメですよ、この信仰の世界は。全託してかからないと。力をぬくと楽にキリストの中に入ってしまう。泳ぎもそうなんです。波に自分を任せてしまふ。波に任せてストロークをしていると、次のストロークとの間にちゃんと休んでいる。静中の動、動中の静という。静動一如の姿になる。だから、私みたいなやつが青年と泳ぎっこして負けない。それは選手にはかなわないけれども。

泳ぎ方は、鯉を見てごらん——まあ鯉に限らないけれども——あの尾ひれの動きをよく見ていなければダメです。そうすると、足は力を入れてはいけない。あの尾ひれのように足は楽に力を入れないで動かしている。疲れないで先に進んで行きますから。何でもそのように、自然を見て、自然から学ばなければダメです。活眼をもつて見ていかなくては。活耳をもつて聴いていかなくては。

「オール アイズ、オール イヤーズ」

という。学校の本ばかりが教科書ではないですから。

「大自然は偉大なる本である」

とは、ゲーテの言葉です。イタリア紀行の中に書いてある。

我々はキリストを得ると、何を見ても、何を聞いても、映画を観ても、必ずそこから真理をキャッチしてしまうから。「あの野郎」なんていつて観てないですよ、あの野郎の中にもちゃんと真理があるから、時々。何であろうと、それが血となり肉となってしまうという不思議なことです。みなこれ創造的に生かしてしまう。それが本当の創造的な人間です。

●神は大芸術家

神さまは大芸術家である。これはシラーが「ディ・キュンストラー」「芸術家たち」という詩の中に書いてある。素晴らしい詩です。私はシラーの「ゲダンケン・リユールック」「思想詩」中では一番好きです。さすがはシラーはカントの美学のまた上を行こうとしている。あの「キュンストラー」という詩はいい詩だね。いっぺんあれを教科書にしてひとつ学生



に教えてやろうかな。なかなか難しい詩だけれども、私は大学時代に一生懸命で読んだ。そこに書いてある。

「エア イスト デア グレースト キュンストラ」

「彼（神さま）は最大の芸術家である」

と。だから、絵画であろうと、彫刻家であろうと、何であろうと、神に学ぶことです。神の芸術は、この大自然とまた人間そのもの、ことに女性は神さまの傑作かもしれない。

とにかく花も素晴らしい。さつきN君が撮った花の写真を見せてもらったが、私は花に酔ってしまった。目がくるくるしてしまった（笑）。それくらい素晴らしい写真です。皆さん、何でもいから打ち込みなさいよ。とにかく、打ち込むことが大事です。

兼好法師が一八八段でちゃんとそのことを言っている。あの『徒然草』は素晴らしい本です。私くらいの年配になって徒然草を読み返すと、さすがは兼好法師さんは偉い坊主だなと思う。

「ある一つの事のためには他の事は捨てろ。惜しむな」

というような角度からものを言ってます。命懸けということはどういうことなんです、何でも。命懸けにやったら、必ず突破します。そして、一番大事なことは、命懸けでキリストを求めることです。

●ウエスレーのお母さん

命懸けの祈りのことをひとつ話そうか。ウエスレーのお母さんは——ウエスレーが大分やっかいな青年だったらしい。だいぶん離れた所において——彼はどうしているかなと。

「神さま、今晚、私は子どものために祈りますが、あなたが聴いてくださるなければ、

私は祈りをやめません」

と言って祈りにかかった。そうして、徹夜的な祈りをした。そうしたらどうですか、ウエスレーがその晩に回心してしまった。この回心の第一歩は、母のこの捨て身の祈りだった。アウグスティヌスのお母さんにしてもそうだ。だいたい、偉い人の——言葉のいい意味においての偉い人ですよ——お母さんというのはみんな魂の質がいい。

女子教育が大事です。第二の国民の母、これは本当にお母さんが大事なんです。たとえ結婚しなくても、第二の国民の母となる。魂の母となるんです。どちらにしろ、女性 は次の国民を本当に育てていく責任と光栄がある。男は理屈っぽくてダメなんです。神さまの世界には女子の方がすつと入る。女子の方が魂のすじがいいんだよ。天国に行けばまさに女子は上位ですから。男の方が下になっている（笑）。地上では男は威張っているけれど、だいたい悪いのはみんな男が悪いことをしている。

お母さんはみんな魂の質がいい。だから、どうしても本当の教育は学校よりもお母さんなんです。お母さんが本当の教育をしていただきたい。もう学校の先生には私は愛想をつ



かしたからね。女の方々に期待します。

●キリストの道は女性道

キリストの道は女性道なんです。「幸福なるかな強き者」なんて書いてやしない。

「幸福^{さいわい}なるかな柔和なる者」

「幸福なるかな悲しむ者」

「幸福なるかな魂の貧しき者」

と。みんなこれ非常に、ちよつとみると弱々しそうなんだ。従順の道、弱き道なんです。だから、ニーチェのやつがそれをはき違えて、

「キリスト教はそんな女々しいのはだめだ」

と、「ウィーバーメンシュ」「超人」なんて言つて、超人の哲学をあみだした。ところが、彼自身が^{きちが}気狂いになつてしまつた。これは事実が証明する。もちろん、ニーチェの言つてい

ることは逆説的な真理はありますけれども、キルケゴールとちよつと相対するやつだ。ところが、この女性道は本当は最も力強い世界です、男性にしても、女性にしても。キリストは本当の女性道を歩いた。そうしたら、彼は本当の男性中の男性であつた。これが本当の人間道という。女性道、男性道が一つとなる。これが一如の世界。

「ダス エービツヒ ヴアイプリツヒエ」

「永遠に女性的なるもの」

とゲーテが言つた。

「ダス エービツヒ メンリツヒエ」「永遠に男性的なるもの」

と、この二つが渾然として一つなんです。これが

「ダス エービツヒ メンシュリツヒエ」

「永遠に人間的なるもの」

これはまだゲーテは言わないよ。私はそこまで言つてやるんです、ゲーテさんのために。永遠に人間的なるものは、このキリストの道を、キリストの在り方を受けとるとそうなる。だから、男でも女でも、自由自在です。

そういうことで、特に第二の国民のお母さんであるところのあなた方は、本当に責任が一番重い。そしてまた一番の栄光を持つている。これはパウロがちゃんと言つてい

「神の栄光はキリストに現れ、キリストの栄光は男に現れ、男の栄光は女に現れる」

と。女性は三重の栄光の輝きである。これは藤井先生がその『^{こひつじ}羔の婚姻』の中でうたつています。そういうわけで、どうぞ、女の方々は大胆に自信を持つてください。一人の女性が本当に一人の男性を作り上げる。男には男を作り上げる資格がない。学校の先生はダメだから。



本当だよな。私は、もうしようがないです、「変わりだね」でも何でも。変わりだねではない、一番これは黄金中道を行っている。孔子は『中庸』という本を書いたが、本当の中庸ということは、右にも非ず左にもなし。右も左も両極をちゃんと持っているんです、本当の真ん中というものは。いわゆる中性ではない。男性と女性の両方をちゃんと持っている。占いが私の手を見て、

「あんたはもの凄い線の太いものと、非常に繊細なものと両方ある」

と言ったよ。そのとおり（笑）。そう言っちゃおかしいけれども、占いはよく見てくれた。

●我は今日こそ汝を生んだ

「汝はわが子、我は今日こそ汝を生んだ！」

という、詩篇のこういう一句を皆さん読んだ時に、

「ああ、昔の詩人はこんなことを言われた。王者はこんなことを言われた」

では、いかんですよ。これは常に新たに、私たちに「汝」と言つて響き語りかけている神の言葉です。これを読んで、冥想して、本当にキリストの中に自分をうち込んで、

「今、私は生まれました。本当に今、私はあなたのものにはつきりなりました。切つても切れないところに入りました」

と、そういうところに入ってください。

「今ここに」

という世界です。明日じゃない。

ドイツの諺に、

「明日、明日、今日ばかりじゃないと怠け者はしよつちゆう言っている」

（モルゲンモルゲンヌールニヒットホイテ、シュプレッヘンアレファウレンロイテ）

というのがある。今日の勉強は明日に延ばす。また明日になると、またその次にのぼす。とうとう今日という日に何もしない。私は学生に言うんだよね、

「今日は勉強しそこなつたと思つたら、もう一遍電気をつけなおして、ドイツ語の本を読んでごらん。そうしたら、よく眠れるから」

と（笑）。本当だよ。

「始めに遊んで次に勉強するでもかまわないから。ドイツの諺は、始めに学んで次に遊ぶというけれども、ひっくり返したつていいから、実行しろ」

と。そういうねばり強い魂になつて食いつかなくてはいかん。ヒルは吸いつくと離れないそうだね。スッポンもそうだそうだ。スッポンやヒルみたいにならなくては。スッポンやヒルに負けてはしょうがない、人間は（笑）。

そういうわけで、キリストは無条件に捉まえようとしていらつしやるのに、逃げることはないですよ。



「うれしいなあ、イエスの御腕は。永遠の御腕が来ている」

と。冥想してくださいよ。神秘の世界というのはそうなんですから、冥想の世界で。これは超現実の最も素晴らしい現実なんです。だから、言葉の深い意味において本当に夢を見る人が本当の現実の中に入って行く。今の青年はあまり夢が足りなくて、打算的な現在主義だからダメだ、そんなのは。私が「現在」というのは、そういった現在、本当に夢を見て、その夢を現在実現していく。祈りの世界はそのようなことです。いいですね。もう私は今ちよつと異言が出そうなんだ。そういうことであります。

●畏れをもって親しむ

⁸我に求めよ、さらば我は与える、

汝が^な嗣業^{ゆずり}として諸々の国を、

汝が有^{もの}として地の極^{はて}までを。

⁹汝は鉄^{くろがね}の杖で彼らをうち破り、

^{すえつくり}陶工^{うつわ}の器の如く彼らを碎く。」

後は別にいいですが、要するに、

「もしこんなことをしていれば、逆らっているやつは全部ひっくり返してしまうぞ」

と。これは旧約の世界だから。メシヤに対してそれだけの力を、権威をこういった表現で言ってます。

¹⁰さればいざ諸王^{さし}よ賢くあれ、

「さらばいざ諸王よ、賢くあれ」というのは、頭が賢くあれではない。本当に神に立ち帰ることが、この「賢くあれ」ということ。

警告^{おそれ}をうけよ地の審士^{さばきびと}ら。

¹¹畏敬^{おそれ}をもってエホバに仕え、

この「畏敬」という言葉は、今の制限漢字では「畏」という字がない。「こわがる」というのはこの「畏」という字でなくてはダメだ。畏敬という。「畏敬をもって」ということは、「平伏^{ひれふ}して」ということです。神さまの前に平伏しなさいと。

昔は天皇陛下の前で最敬礼した。近頃は「てんちゃん」なんて言っつて、わるいよ、あれね。日本の象徴なんだから、天皇陛下は。天皇陛下も象徴として自覚していただきたいわけですから。していないということではないですよ。

あの「フリーデリッヒ ディア グローセ」「フレデリック大王」というのがある。あの人は本当に民のことを思った。それで直訴を受けた。そして一人で散歩して、護衛なんか付けやしない。さすがはフリーデリッヒは信仰の厚い王様でしたから。神を本当に畏れた。そうすると、みんな田舎の人たちが、

「フリッツちゃん、フリッツのお父ちゃん」



と言って親しんだということです。

畏れをもって親しむ。傲慢な気持では本当の親しみは出てこない。畏れをもって、平伏しの心をもって親しむ。だからそこに、

戦慄^{おののき}をもって欲び、

12 子に接吻^{くちづけ}せよ！

なんていう言葉が出てくる。神を畏敬して、しかも神に本当に親しみなさいと。「親しむ」という言葉は素晴らしい言葉だね、「親」という字を書くのは。親と子の関係は、本当に親に親しまなくてはいいかん。畏敬の念をもって親を畏れ親しむ。

私は「孝道師道」ということを今でもはつきり言っています。学校の生徒にも言っている。「孝道師道って何だ？」

なんて思われたら困る。学校では師道、師弟の道はちゃんとある。家では親と子の道がちゃんとある。日本はもういつペンそこに立ち戻らなければダメです。

「民主主義、民主主義」

なんて、まるで悪平等でもって、敬すべきものを敬しないで、何だか妙な傲慢になって、ただ長髪でもってゴタゴタやっている。何とだらしないことかと、嫌になってしまうようなあれ見ていると。

どうぞ、身近なところからはつきりとそれを展開していくことです。私はいつでも投げ捨てる気持だから、何も怖いことないです、正直。そういうわけで、畏敬をもって仕えろという。

彼怒って汝らが途に亡びないために

その怒りはたちどころに燃え立つから。

恵福^{さいわい}なる哉、彼に信頼するすべての者は！

畏敬を持たなかったら神さまの怒りがくるぞと。傍若無神でとんでもない。近頃は「傍若無神」と「傍若無人」と両方ある。とんでもない。

キリストの前に本当に平伏して、そしてこれに親しむところに聖霊は来ますから。無条件に来ます。キリストの中に祈り込むこと、信じ入ること。それは本願の向こうからの浸入、向こうから入ってくる。突入してくる。

「突破突入」というのは、私たちをキリスト自身が突破してくださる。私たちの中に突入してくださる、御霊をもって。これに抗することはできないですよ、恵みの力だから。恵みの力を拒むならば、その人はもう行きどころがないです、正直。恵みの力、力ある恵みですから、こんな楽なことはないじゃないですか。自分を開けっ放して開城すればいい。城を開け渡す。そうすると今度は、不動の城となる。



●聖霊によって生まれなければ

さっきのニコデモのところに戻ります。

「ニコデモ言う『人はや老いぬれば……』」

なんてバカなこと言ってるから、

「イエス答へ給う『まことに誠にお前に言うけれども、人は水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない』」

と、今度ははっきりと言っている。「信ずる」とは仰らない。

「神の国に入れないぞ」

と。「水と霊とによって」という。「水」は、悪かったといって悔い改める。悪かったと言って神さまの前に平伏することが「水」ということ。「霊」は、そうすれば必ず神の霊が入ってくる。キリストの霊が入ってくる。十字架をもつて通つて来たところのキリストの霊が入ってくる。これが「水と霊とによって」ということ。

「聖霊によって生まれなければ、そいつを本当に受けとらなければ、神の国には入れない。また、聖霊を受けたらば入れるぞ」

と。これはもう私ははっきりしているんです、正直。無教会時代はいくらやってもダメなんだ。あるところまで来ても、ジェット機みたいに成層圏に入れないんですよね。雲の下なんだ。雲を突きぬけると、今度はもう雲界といって雲が下にある。晴れ晴れとしているんだ、世界が。ジェット機に乗ると分かりますね。あのジェット機で雲の上を飛んでいるようなのが、この聖霊の世界です。雷が鳴ろうが、みんな下で鳴っている。

「肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。なんじら

新たに生まるべし、

「どうしても生まれなければダメだぞ」というのがこの「生まるべし」で、これは非常に強い。

「どうしても新たに生まれなければダメだと私がお前に言っているのを怪しむ

な。風は己が好むところに吹く。汝はその声を聞けども、何処より来たり何

処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者もかくのごとし」(ヨハネ

3・5〜8)

神秘的な霊的な世界は説明ができないから、まあ風のようなものだと、キリストは仰った。

「風」と「霊」とは同じ言葉です。

そういうことで、私たちはこの詩篇の2篇とヨハネ伝3章の始めの方を読みながら、今日はこの新生の世界に、もうひとつ深く入って行こうというわけです。

●霊界の秘義

ゲーテさんの言葉をちよつと紹介しておこう。1828年3月11日の言葉。

「人を生産的にする力は休息や睡眠の中にもある。また、運動の中にもある。こうした



力は水の中、特に大気の中にも多分にある。野外の新鮮な空気はもともと我々にうつつつけの場所である。そこではあたかも神の霊が人間に直接吹きかかり、神の力がその御稜威^{みいつ}を働かせ給つのである。」

さすがはゲートルです。大気の中に何かしらんけれども、神霊を感じている。これは、『ウェルテルス ライデン』(若きウェルテルの悩み)の始めの方にも出てきます。とにかく、「ゲートル、ゲートル」といったって、ゲートルの一番大事なところの事態をドイツ文学者が読んでいないだよ、分かっている。それで「ゲートル研究」のと、なるほど立派な論文をお書きになりますけれども、あるひとつのポイントが抜けている。私に言わせると。それはやはり霊的な体験をしないという、ゲートルのゲートルたる一番大事なところが読めていない。今引用したこのゲートルの言葉。さつきキリストが言われた、

「何処より来たり何処へ往くを知らざる」

ごとく風が吹いているように、キリストの霊はこの相對界にいくらでも食い込んでいますから。聖霊としては一人びとりに100%に働きたもうから。

「十人いれば十分の一しかこない。ここはだいたい大勢だから、私には二十分の一しか来ないかな」

なんて、そんなことはない。一人びとりにキリストは100%に働きたもう。これが霊界の秘義ですから。

だから、さつきから申し上げておおり、「キリストと我」の「一対一」なので、一対十ではない。十把一絡げでものを言っているのと違う。どうぞ、そういうことで、大勢いますが、一対一です。しかも、大勢いて、一人びとりが一対一でやっているところが、もの凄く今度は大きなコイノニア的な磁場となつて働く。霊的な磁場が働きます。そして、他の方の善き状態が移ってくる。そういう意味でもって、一対一が一即多に移っていく。多を頼んでいたらダメなんです。一に絶すると、多、無限の方に展開していく。

そういう気持でどうぞ祈ってください。新しい方も、決して恐れることなしに、楽に。さつき申し上げたとおり、嵐がくれば嵐となり、波がくれば波となり、無風帯なら無風帯となる。それがこの大自然と即して行くんです、そういう魂は。大自然として。ゲートルが

「ゴット・ナトゥーア・イツヒ」(神・自然・我)

というのは一つとなつている。大自然と即する。宇宙的なキリストですから。私たち自身が、一人びとりが、この小さな有限者が宇宙的な人物に、魂になっていくんです。

●祈りの前の黙祷

私が最初に祈りますから、あと自由に祈ってください。そして、適当なところでまた沈黙してもらいますから。それからまた幾人かの人に祈っていただいて、おわります。

はじめしばらく黙祷。福音書のキリストのどういう場面でもいいですから、皆さんはそ



こを冥想して、キリストに接することです、この黙祷の世界では。たとえば嵐の中にキリストはガリラヤ湖の湖上をかし渡つていらつしやつた。物理法則を越えている。そしてらば、

「変化^{へんげ}の者だ!」

と思つてペテロたちがいぶかしがつた。キリストが

「私だよ!」

と言う。その声にペテロは驚いて、

「あ、そうですか、あなたでしたか。それでは、行かしてください」

と、ペテロはキリストの所に行こうとした。

「では、来なさい」

とキリストが言われたら、ペテロも二、三步湖の上を渡つた。素晴らしい事態です。ところが、ペテロは風と波とを見て恐れた。沈みかかった。これはSOSで、

「助けてくれ!」

と情けないんだ、ペテロは。始めはよかつたけれども。それでキリストが腕をつかまえて舟の中に入れてやつた。それから波を静めてやつた。どうですか。そういうようなキリストを冥想しながら入つていくんです、この沈黙の祈りの世界では。具体的にキリストを冥想しなければダメです。今言つたのは、ひとつの例ですけれども。そうしたら、私はたまらないです、このキリストは。この畳の上にいるけれども、水の上にいるようなことになる。

● 祈り

主さま、あなたはどのような現実においても神の国を現じて、その御言は御力を持ち、

「ラザロよ、出できたれ」

と仰れば、死人までも甦つて出てまいりました。この福音書の現実、私たちの想像を絶するところの驚くべき現実です。また、使徒行伝において使徒たちはその現実の中に入つて行きました。私たちもまた、この現代において使徒行伝の続編を自ら体していきたいく存じております。

どうぞ、主さま、あなたは本当に命の命、光の光、愛の愛、力の力。主さま、本当に私たちはたまりません。あなたに行かなければ、行くところがありません。また、あなたに行けば、一切自由自在であります。どうぞ、その意味において、私たちの祈りの世界でいよいよあなたの中に自分を没入せしめ、そして、本当に贖いとしてくださったあなたのゆえに、おそれなくあなたに本当に捕まえられ、あなたに呼びかけられて、

「われ汝を悦ぶ」

との御声を聞きながら進んでまいります。

主さま、私たちはあなたに一人びとりがダメであるからこそ、あなたは救い上げ、ダメであるからこそいよいよ期待してください。感謝であります。この兄弟姉妹たちと共に、



一人びとりが本当にこの福音書の現実を現実としなければ、私たちはクリスチャンではありません。

どうぞ、この現実を私たちは晨にも夕にも毎日、ご飯を食べ損なっても、この福音書を食べ損なわないように。神さま、そのようにして私たちが——これはただ事ではありません——本当にそのことを実践して、

「もはや私は聖書はいらん。私の中には聖書は生きている」

というほどにもまで私たちは聖書そのものとなっていくことができますように願ひ奉ります。そして、お父さま、我々はあなたの活ける文字と、活字そのものとなり、不立文字とありますが、本当に不立文字そのものとなって、自在となりたくございます。

このことは希望より希望へ、栄光より栄光へ、力より力へと進ましめられてうれしく存じます。この一人びとりがそのようにあなたに顧みられています。どうぞ、あなたの深き御顧み、力強い御顧みを全的に受けとって進ましめてください。今日はこのようにして、私たちはまたあなたの中に生まれ込んで進んでいきます。

お父さま、

「われ汝を生めり」

と。はい、感謝、感謝。主さま、私はまた今日新しく生まれました。かくして、次の日も、永遠の生命わがうちに来たりたもう。この永遠の生命をわかたざるをえません。人に永遠の生命をわかつことが本当の伝道であります。

どうぞ、このようにして、兄弟姉妹たちが、他のいかなる文化も、いかなる哲学も文学も何も与えることができない、ただ一つの大事なものをこの聖書から受けとり、そして、いかなることに自由自在に展開することができるこの境地を、どうぞ、身に体していくことができますように願ひ奉ります。

一人びとりは大事なあなたの使命を負っている存在です。一切、聖名の栄光となることが私たちの讃美であります。そして、お父さま、私たちはこのようにしてあなたを本当に今日、より親しくせしめられ、感謝いたします。ああ、主イエス・キリストさま、あなたは私の一切であり、……（異言）……

主さま、どうぞ、この兄弟姉妹たちがそのような境地にいよいよ入れられ、パウロが本当にいかなる現実においても喜び勇んで突き進んで行った。あのことはただあなたの驚くべき御力が、御愛が、彼をしてかく行かしたのでありました。私たちも、パウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブとなつて、いよいよ一人びとりは進んでまいります。感謝であります。このような集会を、神さま、お導きいただいて、聖名を讃え奉ります。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちの祈りと共に聖名により捧げ奉る。アーメン！

